

2022年8月4日(木)

藤原宮大極殿院の調査(飛鳥藤原第210次) 記者発表資料

独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所
都城発掘調査部(飛鳥・藤原地区)

※現地見学会を8月6日(土)11:00~15:00に実施します(少雨決行)。
※駐車場はありません。

所在地:奈良県橿原市醍醐町
調査面積:565㎡
調査期間:2022年5月9日~継続中

【概要】

大極殿後方基壇および後方西回廊を検出し、その規模と構造を明らかにした。復元される平面規模や大極殿との位置関係から、大極殿後方基壇上の建物は大極殿後殿、後方西回廊はこれに接続する軒廊と考えられる。古代日本の宮都構造の変遷を考える上で重要な成果を挙げることができた。

1. 調査の経緯と目的

大極殿院は藤原宮の中心部に位置し、周囲を回廊で囲まれた東西約120m、南北約165mの空間である。その中央には、即位や元日朝賀などの儀式に際して天皇が出御する大極殿がある。大極殿院については、戦前に日本古文化研究所が大極殿、大極殿院南門、回廊の部分的な調査をおこない、復元平面図を作成している。奈良文化財研究所は、日本古文化研究所の復元案の検証を目的の一つとして、1977年度に大極殿北方(藤原宮第20次)、大極殿院西門(第21次)の調査を実施した。近年は、大極殿院の全容解明を目的として、回廊ならびに内庭の調査を継続的に進めており、2001・2016年度に東門および東面回廊(飛鳥藤原第117次・190次)、2007年度に南門(第148次)、2009年度に南面回廊(第160次)、2017年度に回廊東北隅(第195次)、2018年度に北門および北面回廊(第198次)の調査を実施してきた。これらの調査により、大極殿院各門の位置や平面規模、構造の一部が明らかになるとともに、大極殿院内庭は最終的に礫を敷いて整備されていることが判明した。

2019年度には、東面回廊に取り付く大極殿後方東回廊を発見したことで、藤原宮大極殿院と前期難波宮内裏前殿区画との構造上の類似性が改めて注目されることとなった(第200

次)。しかし、2020・2021 年度に実施した大極殿院内庭東北部の調査（第 205 次）および北部の調査（第 208 次）では、前期難波宮内裏後殿や内裏後殿東脇殿に相当する建物の明確な痕跡は確認できなかった。その一方で、大極殿後方の基壇（以下、大極殿後方基壇）とそれに接続する後方西回廊の存在が明らかとなるなど、新知見が得られている（第 208 次）。

これらの成果をうけ、今年度は、大極殿後方基壇と後方西回廊の規模と構造、およびそれらの造営過程の解明を目的として調査をおこなった。なお、今回の調査区はその一部が第 20 次調査区・第 21 次調査区・第 208 次調査区と重複している。

2. 調査の成果

（1）藤原宮期の遺構

大極殿後方基壇 第 208 次調査で一部検出していた大極殿後方基壇を東西約 14.0m 分、南北約 15.0m 分検出した。後述する宮造営期の排水溝（南北溝 1・東西溝 1）に囲まれた内側が基壇の範囲であり、基壇の南辺は後世の東西水路で壊されている。残存する基壇土は厚さ約 0.5m で、基壇の上面は小学校の建設などによって大きく削平されている。基壇土は黄橙色砂質土・暗褐色砂質土を版築状に積み上げて造成しており、積土の中に拳大の礫を多く含んでいる。なお、基壇の上面で明確な礎石据付痕跡は検出していない。

大極殿後方西回廊 調査区中央部で回廊の棟通りおよび南側柱通りの礎石据付痕跡を各 1 基、合計 2 基検出した。これらは大極殿後方西回廊の東端の礎石にあたり、梁行柱間は約 2.9m（10 尺）である。礎石据付痕跡は直径約 1.0m で、人頭大の礫や凝灰岩を根石として用いる。凝灰岩は二上山産出の凝灰角礫岩で、板状に加工されたものを据付穴隅部に据えている。回廊基壇は東西約 3.4m、南北約 9.2m 分を検出した。残存する基壇土は厚さ約 0.1m で、その大半が後世の耕作によって失われている。黄橙色砂質土・暗灰色砂質土を版築状に積み上げて造成している。

基壇外装 1 凝灰岩の破片を含む南北方向の溝状遺構を、後述する南北溝 1 の上位で検出した。幅約 0.3m、南北約 5.0m 分を検出している。凝灰岩は二上山産出の凝灰角礫岩を主体とする。大極殿後方基壇と後方西回廊基壇を画する、基壇外装の抜取痕跡とみられる。

基壇外装 2 凝灰岩の破片を含む東西方向の溝状遺構を、後述する東西溝 3 の上位で検出した。幅約 0.4m、東西約 2.2m 分を検出している。凝灰岩は二上山産出の凝灰角礫岩を主体とする。大極殿後方西回廊基壇の南辺を画する、基壇外装の抜取痕跡とみられる。

基壇外装 3 基壇外装 2 の南で薄く凝灰岩片が貼り付く遺構を検出した。南北方向に広がり、その範囲は東西約 0.4m、南北約 1.6m である。凝灰岩は二上山産出の凝灰角礫岩を主体とする。

礫敷 調査区南端および西北隅で礫敷を検出した。調査区南端の礫敷は比較的良好に残存しており、上面に後述の瓦堆積が存在する。調査区西北隅の礫敷は後述の瓦敷直下でわずかに残存する。いずれも拳大の礫を用いる。大極殿院内庭の整備にともなうものである。

(2) 藤原宮造営期の遺構

南北溝 1 幅約 0.8m、深さ約 0.3m の南北方向の素掘溝である。第 208 次調査と合わせて合計 14.3m 分を検出した。北端で大極殿後方基壇に沿って東に折れ、後述の東西溝 1 に接続する。大極殿後方基壇の西辺と後方西回廊基壇の東辺を画する、基壇造営時の排水溝とみられる。なお、南北溝 1 の南端は後世の東西水路で壊されているが、水路以南へはのびないことを確認した。検出には至らなかったが、本来は大極殿後方基壇南辺を画する東西溝が存在し、基壇西南隅で南北溝 1 に接続していたと考えられる。

東西溝 1 幅約 0.8m、深さ約 0.3m の東西方向の素掘溝である。第 208 次調査区で約 14.0m 分を再検出した。大極殿後方基壇の西北隅で先述の南北溝 1 に接続する。大極殿後方基壇の北辺を画する、造営時の排水溝とみられる。

東西溝 2 第 208 次調査で検出した幅約 0.6m、深さ約 0.2m の東西方向の素掘溝である。第 208 次調査と合わせて合計約 8.0m 分を検出した。東端で南北溝 1 に接続する。大極殿後方西回廊の北辺を画する、造営時の排水溝とみられる。

東西溝 3 幅約 0.6m、深さ約 0.3m の東西方向の素掘溝を約 8.0m 分検出した。東端で南北溝 1 に接続する。大極殿後方西回廊の南辺を画する、回廊造営時の排水溝とみられる。

掘立柱塀 調査区中央部に存在する東西方向の掘立柱列のうち、2 基の柱穴を再検出した。柱穴の大きさは東西約 0.8m、南北約 0.4m である。大極殿後方基壇および後方回廊の造営中に、大極殿の後方を一時的に区画した塀と考えられる。

足場穴 大極殿後方西回廊周辺で直径約 0.2m の小穴を合計 4 基検出した。大極殿後方西回廊の造営にともなう足場穴とみられる。

(3) 藤原宮廃絶後の遺構

瓦堆積 調査区南端の礫敷の上面で、藤原宮期の瓦が堆積している状況を確認した。藤原宮の廃絶にともない、瓦の一部が廃棄されたものとみられる。

瓦敷 調査区西北部で、幅約 0.9m で東西方向にのびる瓦堆積を約 4.8m 分検出した。礫敷の直上に存在し、藤原宮廃絶後の土地利用の中で人為的に敷かれたものとみられる。

(4) 出土遺物

調査区全域から瓦および土器が出土した。とくに藤原宮期の瓦が多い。このほか、大型の凝灰岩片（竜山石）が出土している。

3. まとめ

(1) 大極殿後方基壇の規模と構造を明らかにした。

第 208 次調査および今回の調査成果から、大極殿後方基壇の規模が判明した。復元される大極殿後方基壇の平面規模は東西約 50m、南北約 16m で、大極殿後方回廊基壇から南北に約 3m ずつ張り出す構造をもつ。基壇の周囲には凝灰岩の切石を用いた外装がほどこされていたとみられる。加えて、大極殿後方基壇周辺には多量の瓦が堆積していたことを既に確認している（第 20 次・第 208 次）。こうした周囲の遺構の状況から、大極殿後方基壇上には瓦葺きの東西棟建物が存在したと判断できる。建物の規模や構造の詳細については情報を得られていないが、基壇の規模を踏まえると、大極殿後方回廊よりも梁行の大きい建物であったと考えられる。

(2) 大極殿後方西回廊の構造を明らかにした。

大極殿後方西回廊の礎石据付痕跡、および回廊造営にともなう排水溝や足場穴を検出した。大極殿後方基壇と同様、回廊基壇の周囲にも凝灰岩の切石を用いた外装がほどこされていたとみられる。藤原宮中軸を中心に、左右対称の位置にある大極殿後方東回廊を参照すると、大極殿後方西回廊についても、桁行約 4.1m（14 尺）等間、梁行約 2.9m（10 尺）等間の礎石建ち、瓦葺きの複廊であると考えられる。

(3) 大極殿後殿と考えられる建物の基壇を確認し、宮都構造の変遷に関する重要な成果を得た。

今回の調査により、大極殿後方基壇および後方回廊の構造が確定した。大極殿院の北部を区画する構造は前期難波宮内裏前殿区画と共通するが、藤原宮大極殿院では、区画の内部に建物は造営されていない（第 205 次・第 208 次）。一方、大極殿後方基壇上に推測される建物の機能に関する手がかりは得られていないものの、基壇から復元される建物の平面規模や、大極殿との位置関係から、平城宮東区第 I 期正殿 SB9140 の後殿 SB10050 に相当するものとみられる。すなわち、大極殿後方基壇上の建物は大極殿後殿、後方回廊はそれに取り付く軒廊と考えられる。以上のように、前期難波宮から藤原宮、平城宮へ続く、古代日本の宮都構造の変遷を考える上で重要な成果を挙げることができた。

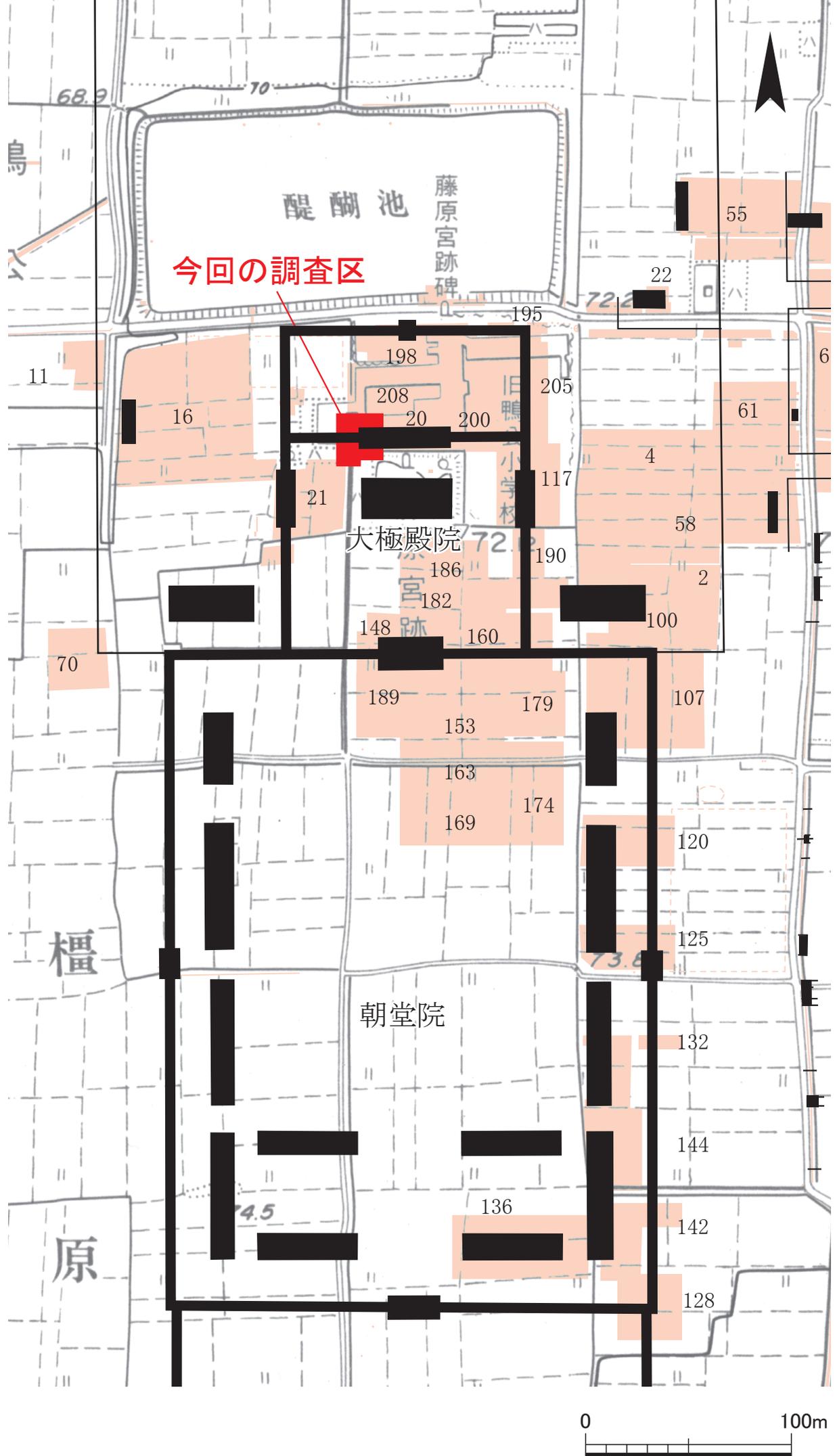


図1 調査位置図 (1 : 2,500)

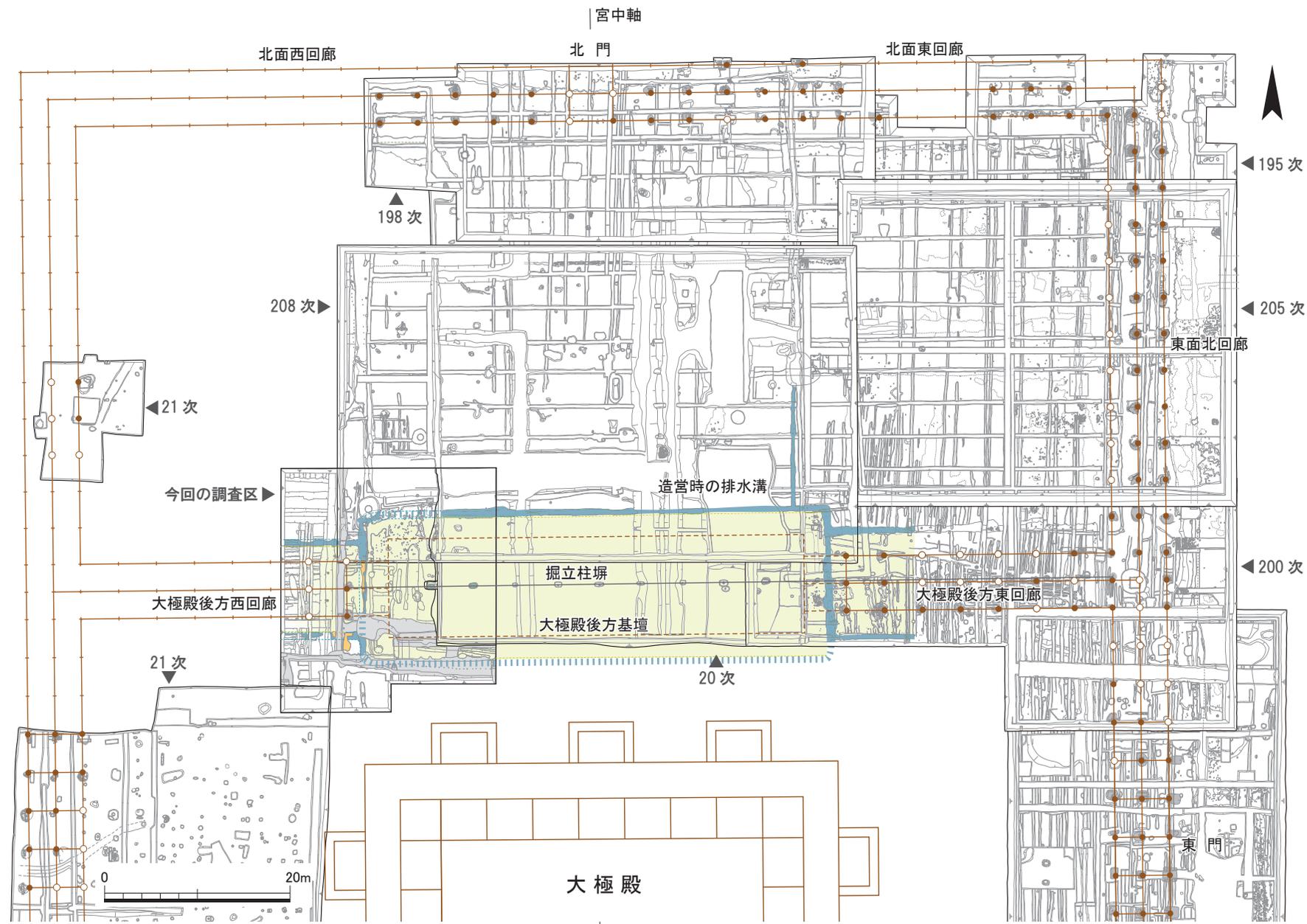


図3 大極殿院北部における既往の調査と今回の調査 (1:600)

内

裏

朝

堂

院

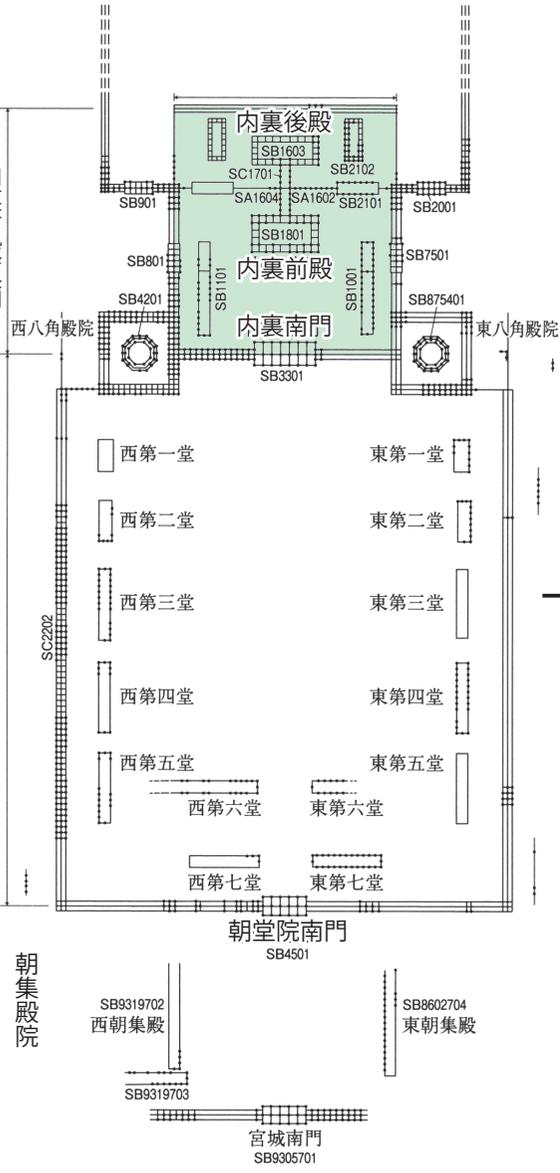
朝

集

殿

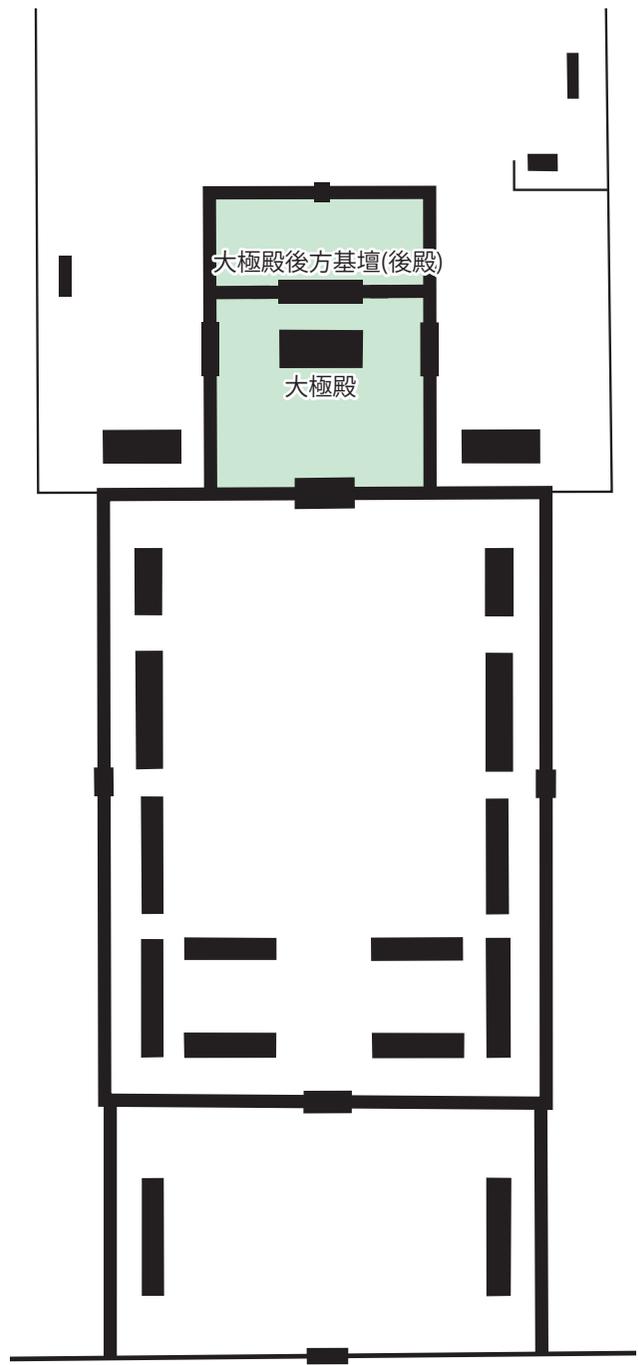
院

内裏前殿区画



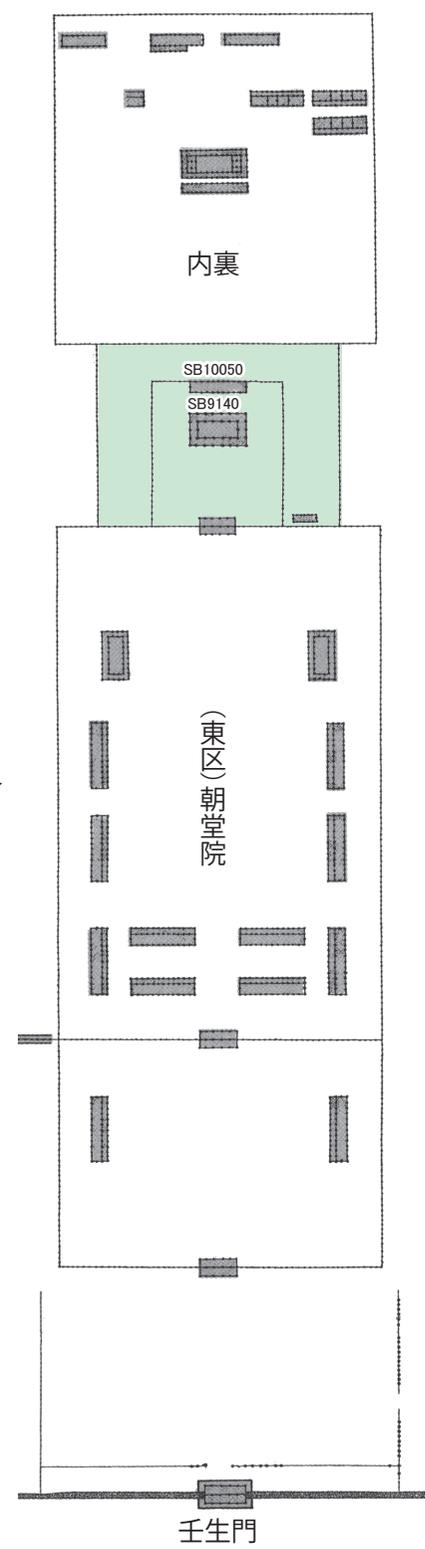
前期難波宮

高橋工 2014 「前期・後期難波宮跡の発掘成果」
(中尾芳治・栄原永遠男編『難波宮と都城制』吉川弘文館) より一部改変。



藤原宮

図4 宮中枢部の構造と変遷 (1 : 4,000)



平城宮東区第1期

壬生門